

ノモンハン事件

平成21年11月7日 高根台公民館

これからお話するノモンハン事件は、ちょうど七十年前、昭和十四年五月から八月にかけて、満州西北部のノモンハンで外モンゴル人民共和国との国境、その頃は外蒙と言っていました。その国境争いをめぐって、日本陸軍がソ連軍に完膚なきまでに叩きのめされた戦いです。しかも、これほど悲惨で、出鱈目な戦いも、そうはなかったでしょう。

第一、いったい何人死んだのか、それさえ諸説あつてはつきりしないのです。ノモンハンで戦った第六軍軍医部調査の数字が、防衛研究所戦史室に残っていますが、それによると動員兵力六万のうち戦死及び生死不明八千七百四十一、戦傷八千六百六十四、戦病二千三百六十三、計一万九千七百六十八人。損耗率は三三%です。三〇%を越せばその軍隊は戦闘能力を失った、五〇%で壊滅的打撃と見做されるのだそうですが、主力となつて戦った第二十三師団に至つては、出動人員一万五千九百七十五人に対して一万二千二百三十人。損耗率実に七六%。十人のうち七人以上が死傷しているのです。世界戦史にも類を見ない、日本陸軍始まつて以来の大敗でした。

何でこんなに負けたのか——一言で言えば、ソ連軍の圧倒的な火力と、戦車、装甲車を中心とした機動力の違いでした。重砲と言つて、大きな大砲でどこかか撃たれる。こつちが一発撃つと、たちまち一分間に百二十発も撃ち返され、兵隊たちは味方の砲兵に、「なるべく撃たないでくれ」と頼むようになったそうです。昭和十一年のベルリン・オリンピックで水泳の四百発自由形に入賞した根上博さんは、立教大学を出て主計少尉として従軍しましたが、こう話しています。「とにかく前にも後ろにも、戦車が十発か二十発のところをガーガー走り回る。こつちは肉弾攻撃しかない。アンパンと言つて、携帯地雷を抱えて飛び込んで行く。サイダー瓶にガソリンを詰めて投げ付ける。思う存分蹂躪されたところを重砲で叩かれ、負けたとしか言い様のないほど悲惨な光景でした」。戦車が横一線になつて、砲塔から火炎放射器を噴射しながらやってくるんだそうです。日本軍の陣地に重油を撒き、その上から火をかぶせる。戦車に踏み潰されなかつた者は、火炎放射器で焼かれる。根上さんは、「機関銃弾も撃ち尽くして、戦術も何もあつたものじゃなかつた」と話しています。

第一線部隊の連隊長クラスで、包囲されて戦死あるいは自決した者が十人、無断撤退の責任を問われて自決させられた者が三人。第一線指揮官のこの異常とも

言える犠牲の多さが、戦闘がいかに熾烈であったかを物語っています。戦車という近代兵器、それも物量で押してくる敵に対して、一番活躍したのが原始的な火炎瓶だったと言うのですから、素手で戦ったも同然でした。これが装備の劣る中国軍を相手にして、「無敵皇軍」などと豪語していた日本陸軍の実態だったのです。

しかも、一番問題なのは、このノモンハン事件が日本の国家的意志とは全く関係なく、現地関東軍参謀の独走によって行なわれたことです。陸軍の言うことをきかなければ何も出来ない、「陸軍あって国家なし」と言われていた時代ですが、その陸軍で統帥権、軍隊を動かす最高の権限を握っている参謀本部でさえ、関東軍の事件拡大の動きを知らなかったのです。下手をすればソ連との大戦争になるかも知れないというのに、軍事行動を広げた後で事後報告をする。関東軍の完全な独断専行でした。参謀たちは後で「まさか、ソ連が、あのような大兵力をあの草原に展開出来るとは、夢にも思わなかった」。こんなことを言っています。が、「戦えば必ず勝つ」という自己過信から来る情勢判断の甘さ、敵を知らず己れを知らず、近代装備されたソ連軍の実力を侮っていました。そして兵隊には、武器弾薬もろくに与えずに、「必勝の信念」のみを要求したのです。

ノモンハン事件については、「人間の条件」を書いた五味川純平さん、芥川賞作家の伊藤桂一さん、現代史の専門家半藤一利さん、つい最近では一橋大学名誉教授の田中克彦さんなど、実に多くの人が書いています。今月からNHKで司馬遼太郎さんの「坂の上の雲」がよいよ始まるようですが、私はその司馬さんに書いて欲しかったなと思うのです。司馬さんは二十年ほど前、「この国のかたち」と題した文芸春秋の巻頭随筆に、「ついに書くことはないだろうと思うが、ノモンハン事変をここ十六、七年来しらべてきた。生き残りの人達にも、ずいぶん会ってきました」と前置きして、こう書いています。

「戦場で生き残って、そのあと免職になった一連隊長を信州の盆地の温泉町に訪ねたときは、まだ血が流れつづけている人間を見た思いがした。その話は、事実関係においては凄惨で、述懐においては怨嗟に満ちていた。うらみはすべて、参謀という魔法の杖のもちぬしにむけられていた。他者からみれば無限にちかいか権能をもちつつ何の責任もとらされず、とりもしないというこの存在に対して、しばしば悪魔！とよんで絶句された」。免職になった連隊長とは、旭川の第七師団歩兵第二十六連隊を率いて、最も勇敢に戦いながら予備役にされ、戦後は上山田温泉で旅館を経営していた須見新一郎大佐です。司馬さんは続けています。

「三元亀天正の装備」という形容を、この元大佐は使われた。当時の日本陸軍の装備についてである。いうまでもなく元亀天正とは、織田信長の活躍の時代のことである。この元大佐とその部下たちはその程度の装備をもってソ連の近代陸軍と対戦させられ、結果として敗れた。その責任は生き残った何人かの部隊長にかぶ

せられ、自殺させられた人もあった」。司馬さんは、さらに参謀について「しかしこの悲惨な敗北のあと、企画者であり演出者であった『魔法使い』たちは転任させられただけだった。たとえば、ノモンハンの首謀者だった少佐参謀の辻政信は上海に転任し、その後、太平洋戦争では大きく起用されてシンガポール作戦の参謀になった。作戦終了後、その魔法の機能によって華僑の大虐殺をやり、世界史に対する日本の負い目をつくることになる」と書いています。

司馬さんが、これほど調べていながら、なぜノモンハン事件を書かなかったのか。司馬さんは、こう言っています。「ちゃんとした統治能力をもった国なら、泥沼におちいった日中戦争の最中に、ソ連を相手にノモンハン事変をやるはずもないし、しかも事変のわずか二年後に同じ『元龜天正の装備』のままアメリカを相手に太平洋戦争をやるだろうか。信長ならやらないし、信長でなくても中小企業のオヤジさんでさえ、このような会社運営をやるはずもない」。本当にその通りでした。司馬さんは「自分がその時に生存した昭和前期の国家が何であったかが、四十年考え続けてもよくわからない。よくわからぬままに、その国家の行為だったノモンハン事変が書けるはずもない」と、こう言うのです。

ノモンハン事件は、昭和の日本陸軍が初めて経験した本格的な近代戦でした。しかも戦闘組織としての欠陥を余すところなく暴露し、大敗したのですから、貴重な教訓になるはずだったのです。内大臣の湯浅倉平は「兵驕るものは敗る。あまり驕慢をきわめた結果この大敗あり。わが国のためには非常に打撃なれども、大局の上にはよき教訓を得たるものなり」。こう言っています。まさに日本陸軍に重大な反省を促す「天の啓示」でした。ところが陸軍は、嚴重な箝口令を布いて、敗戦の事実を隠すことだけに一生懸命だったのです。歩兵第二十六連隊の小野寺哲也という衛生伍長は、衛生兵としては第七師団でただ一人、武功拔群で金鷄勲章を受けたのに、その直後、三日間営倉に入れられています。戦死した戦友の実家へ出した手紙が、「悲惨な状態を知らせた」と憲兵の検閲に引掛かったのです。「ノモンハン帰りは内地に帰すな」。こんな暗黙の指示が各部隊に出され、兵隊の内地帰還を遅らせるため関東軍の様々な部署に転属させたんだそうです。

当時東京外語の学生だった五味川さんは、「ノモンハンで大変な苦戦をしたらしいという噂は、どこからともなく聞こえてきた」。こう書いていますが、ほとんどの国民は、戦争が終わるまで、これほど負けていたとは知らなかったのではないのでしょうか。その頃の新聞を見ましても、地上戦とか苦戦していることは余り出ていないのに、航空部隊の活躍だけが「ソ連機を何機撃墜した」とか、連日派手に載っています。私なんかも翌年の昭和十五年九月、東宝が陸軍省の全面協力で作った航空戦スベクタクル映画「燃ゆる大空」に夢中になり、日本軍は勝ったものだとばかり思っていました。

結局陸軍は、ノモンハンの敗戦について、本格的なメスを入れることもなく、

従つて何ら具体的な対策も立てないまま、太平洋戦争に突入してしまふのです。そしてガダルカナル、インパール、サイパン、レイテと、至る所でノモンハンの二の舞、三の舞を演じることになります。陸軍が戦力と考えたのは、相変わらず兵隊の頭数だけ。兵隊たちが使う武器、弾薬、さらにはその補給についての配慮は、ないに等しいものでした。第一線の将兵は、たとえ弾薬、食糧がなくても、「必勝の信念」さえあれば戦えると考えていたのです。二万人の尊い犠牲によつて得られたはずの貴重な教訓は、ついに生かされることがなかった。私は、ノモンハン事件最大の失敗は、この点にあったと思います。

まず、結論から話すことになつてしまいました。それでは、この事件の舞台となつたノモンハンとは、一体どんな所だったのでしようか。どこまでも果てしなく続く、広漠とした砂地と草原の波状地。草原はどこもかしこも見通しで、目標物としては、東から北へ流れ、やがて黒龍江となる川幅五十キロ、水深一キロほどのハルハ河があるだけです。蒙古人が「ノモンハン」と呼んでいる所は、集落があるわけではなく、時々遊牧民がやつて来て、「パオ」と言つてフェルト張りの組み立て式の饅頭型住居を建てている寂しい場所です。

関東軍で満州の西北方面を担当する第二十三師団は、ノモンハンから北東二百キロのハイラルに師団司令部を置いていました。満州国はハルハ河を国境線とし、河から右岸を満州領としていましたが、外蒙側の主張は違つていました。清朝の時代、遊牧民の牧草地をめぐる争いを防ぐため、ハルハ河から東に十三キロほど入つた所、つまり満州領内に行政境界を置いていたとして、外蒙軍も馬に草を食べさせによく来ていたそうです。しかし、言つてみれば国境不明確地帯。人が住んでいるわけでもなく、国境線が少々ずれたつて大勢に影響はない。国家の威信を賭けて戦争をするような場所ではなかつたのです。

それをノモンハン事件に発展させたのは、要するに、関東軍参謀の火遊びでした。中国戦線で戦っている部隊は次々と都市を占領し手柄を立てているのに、精鋭を誇る関東軍は暇でした。そして一番大きかつたのが、司馬さんが指摘した作戦参謀辻政信少佐の存在です。辻が関東軍にいなかったら、恐らくノモンハン事件は起こらなかつたでしょう。辻は、石川県の山中温泉近くで三反ほどの畑を耕し、炭焼きで生計を立てている貧農の長男として生まれましたが、とにかく秀才だつたようです。あの時代、貧しい家の秀才が世の中に出て行くには、官費で教育してくれる陸軍幼年学校か士官学校、海軍兵学校に入つて軍人になるか、あるいは師範学校を出て教師になるかでしたが、辻は名古屋の幼年学校から陸士を首席で卒業し、陸軍将校の登龍門である陸軍大学校でも三番、恩賜の軍刀を受けています。

昭和七年の上海事変に金沢の第九師団歩兵第七連隊中隊長として出征、先頭に立つて軍刀を振るい、負傷して「勇猛果敢な中隊長」の勇名を馳せました。その年

末から参謀本部勤務になり、辣腕を謳われた辻の幕僚生活が始まります。タイのバンコクで敗戦を迎えましたが、戦犯として逮捕されるのを避けるため僧侶に変装して逃避行を続け、昭和二十三年に帰国すると、「潜行二千里」に始まる一連のベストセラー戦記で脚光を浴びました。その人気をテコに衆議院議員、参議院議員になり、戦乱のラオスへ飛んで行方不明になる。まさに波瀾万丈の人生でしたが、その評価となると、これほど真つ二つに分かれる人も珍しいか知れません。関東軍の参謀長時代、辻を参謀として使った東条英機、後に首相になる東条は、「将来国家の至宝となり得る人物」と最大級の賛辞を贈っています。ところが辻が上海に飛ばされていた時、第十一軍の参謀長は「協調性に欠け、自我が強烈で、将来中央の要職に絶対につけてはならない」と、全く相反する評価です。辻に何度か会ったことのある作家の南条範夫さんは、「自信過剰で自己顕示欲旺盛。私は、この男は間違いなく一種の精神異常者だと考えた」と言っています。

昭和十二年七月七日に盧溝橋事件が勃発すると、関東軍参謀の辻はすぐ北京に飛んで、「関東軍が応援します。思う存分やって下さい」と、現地の連隊長をけしかけています。そして天津の支那駐屯軍司令部にやって来て、「関東軍はあす爆撃機で盧溝橋付近の支那軍を爆撃します。私が戦闘機に乗って行きます」と言うのです。参謀の池田純久中佐がびっくりして「本気か」と聞くと、「本気ですとも。中央がグズグズしているから独断でやります」。池田が「関東軍の爆撃機は、我々の戦闘機で全て叩き落としてやる。責任は俺が取る」。こう言うと、さすがに強気の辻も渋々断念したといえます。内にあっては、常に積極論で参謀部内の議論をリードする。外に出るとは、命令系統を無視し、上級司令部の権威を笠に着て、いわゆる「幕僚統帥」をやる。参謀はあくまで司令官の補佐官であって、幕僚に軍隊を動かす指揮命令権はないのですが、悪しき参謀将校の典型でした。

それにしても当時三十七歳、階級で言えば一介の少佐に過ぎない辻です。それが「影の関東軍司令官」と言われたくらい大きな力を握り、傍若無人に振る舞ったのは、上海事変当時の人間関係が大きかったようです。関東軍司令官の植田謙吉大將は第九師団長、参謀長の磯谷廉介中将は歩兵第七連隊長でしたし、参謀副長の矢野音三郎少将も第七連隊将校団の先輩です。三人とも辻を可愛がりましたし、信頼も絶大でした。磯谷は戦後「なぜ辻を信頼したのか」と聞かれて、「積極果敢なところが気に入った」と答え、「間違っていたかなあ」と首をかしげていたそうです。しかも、作戦課長に当たる高級参謀の寺田雅雄大佐、作戦主任参謀の服部卓四郎中佐は着任したばかり。昭和十一年四月から二度も関東軍参謀をやつて、満州に詳しく、強気な辻が関東軍を引っ張って行く形になったのです。

ノモンハン事件は、もともとは見過ごしても何でもないような、些細な国境紛争でした。それを武力衝突に発展させた引き金は、実は辻が作成した「満ソ国境紛争処理要綱」にあったのです。関東軍はノモンハン事件の二週間前、昭和十四

年四月二十五日に軍司令官師団長会同でこの要綱を示達しましたが、国境確保の強い意志を示す、極めて攻撃的なものでした。ソ連との国境紛争が十二年に百十三回、十三年には百六十六回と年々増えている時です。参謀本部としては、泥沼化している支那事變の処理に手いっばい。とにかく満州では、ソ連と事を構えたくありません。ですから、関東軍に対しても小さな紛争などは問題にせず、対ソ作戦の備えに専念させたい考えでした。ところが実際に紛争が発生した時、どんな場合に兵力を使うべきか、またどの程度使つたらいいのか。こうした具体的な方針が関東軍に示されず、曖昧なままでした。ここに辻の強硬な処理要綱が登場して来る、言ってみれば関東軍の暴走に付け込まれるスキがあつたのです。

この処理要綱が問題なのは、「軍八侵サス侵サシメサルヲ満州防衛ノ根本基調」としながら、「不法行為に対しては徹底的にこれを膺懲し、その野望を初動に於て封殺破摧す」と、攻勢を取る姿勢を明確にし、前面に押し出したことです。しかも「急襲殲滅の目的達成のために、一時的にソ連領内に進入すること」、つまり越境を認め、「国境明確でない地域では防衛司令官が自主的に国境線を認定してよい」としています。これでは国境紛争を奨励し、「どしどし武力で解決しろ」と言っているようなものなんです。とにかく作戦優先、その前に必要な外交交渉は、辻の頭には全くなかつたのです。

軍司令官師団長会同の席上、真つ先に疑問を呈したのが第三軍司令官の多田駿中将でした。「お示しどおりにやると、あるいは思わざる結果を起こすかも知れない。少し考慮の余地を与えられたい」。多田は前年の末まで参謀次長をしていて、支那事變の話し合い解決を強く主張した人ですが、辻の要綱に危険なものを感じたのでしよう。ところが植田関東軍司令官は「それはこの植田が処理するか、第一線の方々は何ら心配することなく断固として侵入者を撃退されたい」。いともあつさり、多田の懸念を斥けてしまったのです。一見頼もしい、関東軍司令官のこの一言が、関東軍全体に紛争が起きたらすぐ武力出動。この決意を固めさせ、紛争をエスカレートさせる要因になりました。

もう一つ問題なのは、関東軍はこの要綱を中央に報告したのに、参謀本部が何ら明確な指示をしなかつたことです。参謀本部があくまで満ソ国境の紛争を望まないのなら、こんな危険な要綱にはすぐブレーキをかけるべきだったのです。関東軍には張作霖爆殺事件に始まり、満州事變、上海事變と、謀略と独断専行の歴史がいっぱいあります。「紛争が起きたら、まず中央に報告し指示を仰げ」と指令すべきでした。それをしなかつたものですから、関東軍は当然、要綱は中央で承認されたものと受け取りましたし、中央の統帥が乱れる原因にもなつたのです。

私が驚くのは、アメリカのグルー大使がこうした関東軍の特質を的確に見抜いて、国務長官に報告していることです。グルーは言っています。「日本の態度を考慮するに際しては、本国政府と出先軍部との間に著しき懸隔の存在する事実を

常に留意する必要がある。日本を相手にするに当たり、實際隠れた二個の政権を相手としつつあって、彼等の明白な目的は、外国権益の驅逐及び支那市場の占有に在る」。外国人にも分かる国家としての問題点を放任したことが、結局は太平洋戦争につながるようになるのです。

ところで、辻がこうした強硬方針を立てた背景には、カンチャーズ島事件と張鼓峰事件という二つの国境紛争がありました。盧溝橋事件の半月ほど前、昭和十二年六月十九日、黒龍江の中洲にある小さな島、満州領になつてゐるカンチャーズ島にソ連の国境警備隊が突然上陸して、占領してしまつたのです。外交交渉でソ連は兵力引き揚げに同意していたのですが、三十日になるとソ連の砲艦三隻が沿岸の日本軍部隊を砲撃してきました。関東軍も応射して一隻を撃沈、一隻を大破させ、日本の嚴重抗議にソ連軍も七月五日までに撤兵しましたが、これが関東軍参謀に「とにかく一撃することだ。国境紛争には、外交交渉より武力処理の方が即効的だ」。この考えを植え付けることになつたのです。

しかし、裏には裏があるもので、ソ連がこんな露骨な国境侵犯をしたのは、スターリンの「血の粛清」によつて動揺してゐる国内の目を、満ソ国境の緊張に向ける狙いがあつたようです。ソ連では反スターリン派の粛清が行なわれ、六月十二日にはトハチエフスキー参謀総長ら赤軍最高幹部が軍律違反で銃殺刑になつたばかりでした。ニューヨーク・タイムズは、社説でこう指摘しています。「モスクワ政府は各方面における今日の混乱から脱出し、動揺しつつあるソ連政府の崩壊を食い止めるために、今回の事件を内心において歓迎してゐるかもしれない。即ち国民の不安を一掃し、国民に挙国一致の国防を強制するために今回の事件を利用するであらう」

十三年六月十三日の朝には、ソ連の秘密警察エヌ・カー・ヴェー・デーの極東長官リシユコフ三等政治大将が、東満州の琿春を越えて亡命してきました。リシユコフは前年、三十七歳の若さで拔擢されたばかりでしたが、そのハバロフスク着任が前任長官の逮捕で始まつたように、いつスターリンの「血の粛清」が自分の身に及ぶか分かりません。管内視察に出た際、「ちよつと先まで見てくる」と言つて、副官を車に待たせたまま亡命したのです。

すると日本側の出方を探る狙いがあつたのか、ソ連軍が七月十一日、満州南東部の豆満江上流二十^キにある張鼓峰に進出し、陣地構築を始めたのです。参謀本部は不法越境として朝鮮軍の第十九師団に出動を命じましたが、武力行使については中国大陸で漢口作戦を準備中であり、また天皇の裁可が得られる見込みもないことから、武力発動はしない方針でした。ところが睨み合いが続く中、尾高龜蔵師団長が三十日夜、独断でソ連軍を攻撃し、ソ連軍も航空機、戦車を繰り出して五日間にわたる激戦となつたのです。八月十一日、モスクワで停戦協定が成立し、第十九師団は五百二十六人の戦死者を出して撤収しました。その直後、現

地を視察した辻は、張鼓峰一帯が結果的にソ連領になったのを見て、「こんなざまでは、関東軍にもすぐ跳ね返ってくる。ソ連になめられないためにも、越境には即座に一撃することだ」と、強硬方針を取ることに決めたのです。

ただ辻たち関東軍参謀は、「森を見て山を見ず」と言うことでしよう。ソ連の外蒙支配強化という、重要な動きを見落としていたのです。外蒙は大正十年に独立宣言しましたが、中国は認めていませんでした。これに対してコミンテルン極東書記局は昭和四年、「外蒙に定着した影響を維持すること」を方針とし、積極的な援助を始めたのです。日本が満州を支配するようになると、危機感を強めたソ連は極東軍の増強を図ってきましたが、中でも注目したのが外蒙の戦略的価値です。しかし外蒙では、ソ連型計画経済の強行とラマ教弾圧により反ソ暴動が起り、内蒙への逃亡者も続出するようになっていました。スターリンは昭和十一年二月、ゲンデン首相を「反ソ的」という理由で追放すると、三月十二日には「ソ蒙相互援助議定書」を結んで、外蒙にソ連軍を導入する土台を作ったのです。

支那事変が始まると、外蒙でも「肅清の嵐」が吹き荒れました。親ソ派のチョイバルサン元帥が実権を握り、政府、軍の幹部を「反ソ、日本の手先」として一斉逮捕、二万人が処刑されたと言われます。そしてソ連は十二年九月四日、第五十七特別狙撃軍団を編成して外蒙の首都ウランバートルに進駐させたのです。狙撃一個師団、戦車四個旅団、飛行機一個旅団を満州国境付近に集中配備しましたから、外蒙軍とぶつかればすぐソ連の機械化部隊が出てくる態勢が出来ていたわけです。

昭和十四年に入ると、ノモンハン付近の紛争が目立って増えてきました。一月に満州国の監視哨付近で外蒙兵十三人を捕虜としたのですが、チョイバルサンは一月二十七日、「日本軍の武力侵犯を徹底的に壊滅せよ」と命令し、ノモンハン方面に兵力増強の措置を取っています。何しろ、国境確保にちよつとでも消極的な姿勢でも見せようものなら、すぐ「日本の手先」として肅清されてしまうのですから、こうした外蒙の強硬姿勢もノモンハン事件を拡大させる要因となったのです。スターリンもまた、三月十日の共産党大会で「ソ連に対する如何なる侵略も二倍の反撃を以て応えられよう」。こう演説しましたが、関東軍の参謀は三十四年前の日露戦争勝利の栄光に酔っていて、「ロスケは突撃すれば逃げるのだ」と、なめ切っていました。それにソ連の軍事基地は、満蒙国境から七百キロも離れており、万一戦闘になっても、短期間で大兵力を集中できるとは思っていませんでした。

ノモンハン事件は、まさにこうした時に勃発したのです。五月十一日の朝、パトロール中の満州国国境巡察隊がハルハ河を渡ってきた外蒙兵を発見し、撃退したことから始まりました。十二日には「再び七百越境」と報告してきましたが、実際は五十人足らずだったそうです。十三日に報告を受けたハイラルの第二十三

師団司令部では、「国境紛争処理要綱」を徹底させるため、各部隊長を集めて会議中でしたが、師団長の小松原道太郎中将にとつては、早速要綱を発動して武力出動の絶好のチャンスです。直ちに東八百蔵中佐の師団搜索隊を出動させましたが、外蒙兵がハルハ河左岸に撤退したため搜索隊も引き揚げました。

しかし、チヨイバルサンの方は重大事態ととらえ、外蒙騎兵師団とソ連の第五十七特別狙撃軍団をハルハ河右岸に進出させて来たのです。小松原師団長は二十一日、「今度こそ撃滅してやる」と、歩兵第六十四連隊長山県武光大佐の指揮する山県支隊千三百人を出動させました。小松原はソ連駐在武官、参謀長の内孜大佐もラトビア駐在武官をして、陸軍部内ではソ連通として知られていましたが、甘く見ていたのでしょうか。「ソ連兵が姿を見せている」という報告を受けていたのに、砲兵部隊を出動させませんでしたし、一番大切な事前の敵情偵察もさせなかったのです。

山県支隊の攻撃は五月二十八日の明け方から始まりましたが、先頭を行く二百二十人の東搜索隊がまずぶつかったのが、戦車、重砲と、思いもかけないほど強力な戦闘態勢を取っているソ連軍でした。搜索隊はたちまち敵中に孤立し、再三山県支隊に応援要請をしましたが、来援はわずかに一個小隊だけ。山県支隊は猛烈な砲撃で、動くに動けなかつたのです。ハルハ河の左岸、つまり外蒙側は急勾配に高くなつていて、右岸の満州側より数十センチから百センチ高い台地になっています。右岸数キロにわたって外蒙側からは丸見えなのに、逆に満州側からは全く見えません。この高台に重砲陣地を置いたソ連軍は、それこそ射的場の標的を狙い撃ちするように、正確で猛烈な砲撃を加えてきたのです。

孤立無援のまま無数の戦車に包囲された東中佐は、二十九日の夕方、残った二十数人を率いて突撃し戦死しました。二十四日付で軍隊用の通信紙に慌ただしく書かれた遺書は、奥さんに「最モ幸福ニ人生ヲ送りタリ」と感謝し、四人のお嬢さんには「母ヲ大切ニシ立派な人ニナレヨ」、そして「靖国神社ニテサラバ父」と結ばれていました。搜索隊だけで半数以上、百十五人が戦死しましたが、その頃ハイルの小松原師団長は、「増援を送るから全滅を期せ」と山県大佐に命令し、植田関東軍司令官もまた小松原師団長に、「ノモンハンにおける貴軍の赫々たる戦果を慶祝す」と祝電を打ってきたのです。「戦えば必ず勝つもの」と楽観し、まさかそんな悲惨なことになっていようとは、思ってもいなかったのです。

三十日になると、ソ連・外蒙軍が左岸に撤退したため、山県支隊も遺体を収容して引き揚げ、ノモンハンの第一次戦闘は終わりました。日本側としては一応国境線も確保したので、「これで一件落着」と考えましたし、辻参謀も来訪した参謀本部参謀に、「もうノモンハンは終わりましたから、ご安心下さい」と言っていたくらいです。しかしソ連軍の撤退は、本格的な大攻勢の準備のためでした。

実はソ連赤軍のスパイ・ゾルゲは六月四日、東京から重要な極秘電報を打って

いたのです。ゾルゲは「最強の諜報組織」と言われたゾルゲ機関を作り、昭和十九年十一月、元朝日新聞記者尾崎秀実と共に死刑になったドイツ人です。ゾルゲが昭和五年上海で諜報機関を組織した時、朝日の上海特派員をしていた尾崎も参加したのですが、そのゾルゲが日本の対ソ政策を探る目的で、ドイツの新聞特派員の肩書で来日したのが昭和八年の秋でした。尾崎は、近衛文麿のブレーンである「昭和研究会」に所属し、近衛が首相になると内閣囑託として首相官邸の地下に一室を構え、書記官長室などに自由に出入りしていましたから、かなり高度な情報も入手できました。ゾルゲの方は、そうした尾崎情報をもとに、ドイツの大使館付陸軍武官でやかて大使になるオット少将の絶大な信頼を得て、大使館の情報顧問となり、こちらも大使館に入ってくる情報は全て握っていたのです。

ゾルゲも、独断専行という関東軍の特質を的確に見抜いていました。「日本がソ連との本格的戦闘に走る見込みは少ない」としながらも、「にもかかわらず、関東軍の独走傾向が増大したため、大規模衝突の可能性はある。日本人、とくに日本軍とは総じて鞭を使って初めて交渉を行なうことが出来る。衝突の拡大を防止するためには、毅然とした厳しい手段を用いること勧告する」。ゾルゲはこう打電し、ソ連もまたそのように行動したのです。まず白ロシア軍管区司令官代理のジューコフ中将、やがて第二次大戦の英雄となるジューコフを第五十七特別狙撃軍団長に任命し、ノモンハンの戦場に送り込みました。

ジューコフの行動は迅速でした。戦場から百二十キロも離れていたタムスクの戦闘指揮所をハルハ河の最前線に進出させると、兵力増強を要請したのです。これに対してスターリンは、「攻者三倍の原則」、「攻める側が、防ぐ側の兵力の三倍であれば必ず勝てる」。この兵法の原則に忠実に従って、要請以上の大兵力を派遣したのです。お手元の資料に詳細を書いておきましたが、この辺が兵力小出しの失敗を繰り返した日本軍と違うところです。軍用資材もまた、膨大な量が緊急輸送されました。それは日本軍の予測をはるかに上回るものでしたが、日露戦争の時、陸軍の作戦計画を立てた児玉源太郎は、常にロシア軍の三倍の兵力を用意したものでした。それでもなお負ける場合も想定して、その対策も立てていました。昭和の陸軍にそうした細心さがなくなったのは、負けたことを知らない軍人の奢りでしょう。

情報がなかったわけではありません。ソ連大使館付陸軍武官の土居明夫大佐は六月中旬、シベリア鉄道で帰国する時、極東に送られて行く重砲八十門と大部隊を目標しました。夜も寝ないで追い越して行く軍用列車の数を数え、新京の関東軍司令部に寄って「ソ連は極東に大機械化部隊を送っている。慎重にするように」——こう警告したのですが、参謀たちは聞く耳を持ちません。辻に至っては「ソ連軍の戦車を持って来て、戦勝祝賀観兵式をやるうと思っっているんだ。余計なことを言うな」。土居が「ソ連の一個師団は、日本の何倍もの火力を持っているのを

知らんのか」と言っても、辻は「関東軍は今、一挙にソ連軍を撃滅する意気にあふれている。その時に意欲に少しでも水を差すような消極論は禁物だ」。

第二次戦闘の始まりは、六月十九日の小松原師団長の緊急電報でした。再びハルハ河に進出してきたソ連軍を、「防衛の責任上、徹底的に膺懲したい」と言うのです。寺田高級参謀は「しばらく事態を静観したらどうか」と慎重論でしたが、辻は「国境侵犯を繰り返さないためには、最初に痛撃を加えて関東軍の力を思い知らせる。関東軍の不言実行の決意を示すことだ」。こう主張し、服部作戦主任参謀も支持しました。辻が立てた作戦計画は、第二十三師団に代えて日露戦争以来精強で知られる旭川の第七師団を主力とするものです。と言いますのは、第二十三師団が歩兵力、火力共に劣る弱小師団だったからです。

昭和十一年の第三次国防方針改訂で、ソ連、アメリカを仮想敵国とし、陸軍は平時十七個師団を二十七個師団にすることにしましたが、容易なことではありません。そこで考えたのが、それまで一個師団四個連隊編成だったものを三個連隊編成に間引きして、師団の数を増やすことにしたのです。連隊の数が減れば、当然砲兵などの特科部隊も縮小され、大砲に至っては三八式野砲、明治三十八年採用という旧式なものです。第二十三師団はこの「三単位師団」として、一年前に編成されたばかりでした。しかも兵隊の大部分は、新しく補充された初年兵、二年兵。満州に渡ってから半年は、もっぱら寒さに耐える耐寒訓練が中心、ろくに戦闘訓練もしないうちにノモンハン事件にぶつかつたのです。

ところが、植田軍司令官は反対です。「ノモンハン是小松原師団長の担当正面だ。それを他の師団長に解決させるのは、小松原を信用しないことだ。自分が小松原だつたら腹を切る」。この浪花節的な一言で、第二十三師団主力に変更されてしまいました。結局、第七師団から須見大佐の歩兵第二十六連隊を小松原の指揮下に入れ、兵力一万五千、火砲百二十門、戦車六十七台で攻撃することになったのです。作戦会議では磯谷参謀長が、「一個師団という戦略単位の軍を動かすのだから、予め参謀本部の了解を得ておくことが必要だ」と主張しましたが、辻の強引な論理に押し切られました。「越境ソ連軍を排撃することは、関東軍司令官の任務に属する。中央と打合せていては、戦機を逸する恐れがある」と言うのです。しかも六月二十日、関東軍作戦命令として発令した後で、夕方になって参謀本部に報告するといった、関東軍の完全な独断専行でした。

中央では反対論が続出しました。中でも陸軍省軍事課は、「こんな大して意味のない紛争に大兵力を投ずる必要があるのか。無意味な消耗を認めるわけにはいかない。外交交渉で解決すべきだ」。強硬に反対しましたが、ここでも陸軍大臣板垣征四郎の「まあ一個師団ぐらいなら、いちいち喧しく言わないで、現地に任せたらいいではないか」。この一言で、関東軍の作戦命令は追認されてしまったのです。板垣自身、関東軍高級参謀の時、柳条湖で満鉄を爆破して満州事変を起

こしているのですから、独断専行には慣れっこになつていたのでしょう。

軍隊はいざという時、国家の命運を賭して戦うのです。合理性、効率性を最もシビアに追求すべき組織のはずなのですが、精神主義の強い日本陸軍では、いつも威勢のいい強硬論が主導権を握り、大雑把な樂觀主義が幅を利かしました。関東軍の機密作戦日誌は、「鶏ヲ割クニ牛刀ヲ以テセンコトヲ欲シタルモノ」と記録しています。鶏のようなソ連軍に第二十三師団を派遣するのは、牛を切り裂くのを使う大きな包丁を使うようなものだ、と言うのです。須見連隊長が小松原師団長に転属の申告に行くと、まるでお茶でも飲みに行くみたいだに「とにかく行って貰えばいいんだ」。幼なじみの大内参謀長も、「どの道、須見さんには金鶏勲章をあげるようにしますよ」。こちらも遠足にでも行くような調子だったそうです。

こうして、「勝つのが当たり前前」といった空気の中で、「ノモンハンの悲劇」の第二次戦闘が始まるのです。

×

×

ノモンハンでの第二次戦闘は、六月二十七日の早朝、百十九機の大編隊によるタムスク爆撃で始まりました。奇襲は成功し、撃墜破百五十機、味方損害四機という大きな戦果を挙げましたが、タムスクは国境から百二十^キも離れた外蒙領です。越境爆撃ですから、当然天皇の大命が必要なのですが、これも関東軍の独断専行でした。二十三日に第二飛行集団に攻撃命令を出す時、寺田高級参謀は「中央と意思統一が出来ていない」と反対しましたが、辻や服部作戦主任参謀は、「敵基地を空襲することは、防衛の責任上、戦術的手段としては当然であつて、その権限は関東軍司令官にある。大命を仰ぐ筋合いではない」。こう言つて押し切つたのです。

辻たちは、参謀本部の「不拡大方針」を知っていました。お伺いを立てれば反対されるに決まっていますから、一切内緒で準備を進め、事後承諾させることにしていたのです。ところが二十四日の夕方、参謀次長の中島鉄蔵中將から「事件拡大を招く恐れがある」として、爆撃の自発的中止と、連絡のため参謀を派遣するとの電報が飛び込んできました。業務連絡に上京した関東軍の参謀が爆撃計画を洩らしたため、驚いた参謀本部が慌ててストップをかけてきたのです。ただ参謀本部のミスは、自発的中止といった曖昧な形ではなく、参謀総長名ではつきりと中止命令を出さなかつたことでした。辻たちは「参謀本部の使者が来てからでは爆撃できなくなる」と、爆撃強行に踏み切つたのです。

とにかく大戦果ですから、寺田高級参謀が「どうだ」と言わんばかりに参謀本部に事後報告をすると、作戦課長の稲田正純大佐はいきなり「バカ、戦果が何だ」と怒鳴り付けたそうです。稲田とすれば、関東軍の地位を尊重して自発的中止を期待していたのに、これではぶち壊しです。ところが辻は、手記に「敵か味方が参謀本部」と書いています。「死を賭して敢行した大戦果に対して、第一線の心理を

無視し、感情踏み躪って何の参謀本部であろう」と言うのです。ここから関東軍と参謀本部の感情的な対立、さらにはことさらに参謀本部を無視する態度が激しくなっています。

中島参謀次長も午後、磯谷関東軍参謀長に「事前に連絡がなかったのは甚だ遺憾だ。この問題は影響するところ極めて重大」と、叱責電報を打ってきました。これに対して辻は、「北辺の些事は当軍に任せて安心されたい」と返電したのです。「命により」と関東軍司令官の意向で発信されたことになっていますが、事實は決済者もなく、辻の独断で打電されたものでした。それにしても、越境爆撃をすれば大戦争に発展するかも知れないというのに、「北の辺地の些細な事件」とうそぶくとは。辻は、統帥権をどう考えていたのでしょうか。外には統帥権を振りかざして、総理大臣といえども軍の作戦には口出しさせない。内には勝手に都合のいい解釈をして、中央を欺いてでも事件を拡大させる。そして下には軍紀厳正を要求し、「死んでも陣地は守れ」と命令する。軍司令官は参謀の言いなり、完全なロボットでした。

参謀本部としては、これ以上関東軍に勝手なことをされてはたまりません。そこで二十九日、大本営陸軍部命令と指示を出して、地上戦闘行動の国境地区への限定を命じ、敵根拠地に対する空中攻撃は行なわれないよう指示したのです。しかし参謀本部の命令は、いつも曖昧なんです。これも総長が閑院宮様で言わば飾りもの、実質的に参謀本部を取り仕切る次長の中島は中将です。どうしても、軍司令官中の軍司令官である関東軍司令官の顔を立てる、強制ではなく出来るだけその自主性に任せるといった、遠慮が出てきます。例えばお手元の資料の「大陸命第三二〇号」、大陸命というのは大本営陸軍部命令のことですが、「国境不明確地帯で兵力使用に不便な地域」というのは、明らかにノモンハンのことです。ここでは「兵力を以てする防衛は、状況によって行なわなくもよい」、つまり放っておいてもいいとしているのですが、「状況によって」なんて表現では解釈次第でどうにでもなります。まして事毎に紛争を拡大しようとしている関東軍参謀ですから、ここははつきり作戦中止命令を出すべきでした。

結局関東軍は、爆撃こそ中止したものの、「越境ソ連軍撃滅」という従来の方針には、何ら変更を加えなかったのです。六月三十日に出された攻撃命令は、第二十三師団主力を以てハルハ河左岸の敵砲兵陣地を撃破する。つまり外蒙領内への越境攻撃を認め、その後右岸のソ連軍を背後から攻撃する。安岡正臣中将指揮の戦車団がこれに呼応して、右岸の敵を殲滅するというものでした。確かに、戦車六十七台、装甲車十四台の大機械化部隊出撃は、日本陸軍始まって以来のことでしたが、この辺が日本陸軍の能天気なところで、小松原師団長も参謀たちも「これだけの大部隊で攻撃すれば、敵は逃げてしまふのじゃないか」。敵の退却を心配して、一刻も早い攻撃をと、十分な準備も事前の偵察も行なわぬまま攻撃に

入るのです。

ハルハ河渡河作戦は七月二日の夜、大雷雨の中、稲妻の光を頼りに始まりました。しかしたちまちソ連軍の激しい砲撃に阻止され、ほとんど前進できません。そこへソ連軍は日本軍の五倍以上、戦車百八十六台、装甲車二百六十六台を繰り出してきたのです。しかも頼みとする日本の戦車は、須見連隊長に言わせると、「お豆腐」みたいに頼りないもの。西欧列強は戦車を主兵、中心になって戦う部隊として、歩兵、砲兵をこれに協力させる。戦車を「機動力のある戦闘部隊」の中核にする考えで作っています。ところが、第一次大戦の血みどろの近代戦を経験しなかつた日本陸軍では、主兵は相変わらず歩兵でした。ですから、戦車も歩兵の白兵突撃を助けるため敵の機関銃陣地破壊が任務であつて、戦車と戦闘するようには作られていないのです。

八九式中戦車、皇紀二五八九年、昭和四年に作られた日本の戦車第一号にしても、五七^リ砲の砲身が短いため貫通力がありません。ソ連のBT戦車に命中しても、簡単に跳ね返されました。その上、装甲が一七^リと薄いものですから、BT戦車の七五^リ砲や対戦車砲にはすぐぶち抜かれたのです。昭和十年採用の九五式軽戦車に至つては、装甲一二^リとあるかなしかの防御力。これでは機関銃弾にも耐えられず、とても戦車と言える代物ではありません。ソ連の方は、スターリンが赤軍強化のため戦車の大集団戦略構想を打ち出し、早くから農業用トラクター工業の育成に力を入れてきました。戦時になればすぐ戦車工業に代わるわけで、BT戦車もその一環として大量生産向きに作られ、車体は雑なものでした、装甲は厚くスピードも日本の戦車の二倍もありました。

日本の戦車部隊が勇敢に突進しても、砂地にクモの巣のように張られたピアノ線鉄条網に苦しめられました。蛇腹状のピアノ線がキャタピラーに絡みつき、動けなくなつたところを狙い撃ちにされたのです。戦車第三連隊は連隊長の吉丸清武大佐が燃える戦車内で戦死し、戦車十三台、装甲車五台が炎上、破壊されました。戦車第四連隊も戦車十一台を失い、三日間の戦闘で戦力は半減です。そして七月十日には、「今後に備えるため」という何とも奇妙な命令が出て、戦車団は戦場を後にして駐屯地に引き揚げてしまったのです。関東軍にとつては、こんな戦車でも虎の子です。「これ以上の消耗には耐えられない」というのが本音でした。陸軍省は戦車部隊強化のため、七月十五日から満十五歳以上の少年を対象に、少年戦車兵を募集することになっていました。関東軍もこの戦車団を母体に在満戦車部隊を強化拡充する予定でしたから、兵隊は殺しても戦車を潰すけにはいかなかったのです。兵隊は一枚一銭五厘の葉書で、いくらでも召集できました。

ソ連軍も戦車三十二台、装甲車三十五台と、日本軍以上の大きな損害を出しましたが、主役となつて活躍したのが火炎壘です。兵隊たちに「サイダーを飲んだら、空瓶は捨てずにそのまま持つて行け」と命じたのは、須見連隊長です。第一

次戦闘で東搜索隊が戦車に追い詰められた時、進退極まった衛生兵がそれこそ自棄のやんばちで、持っていたアルコール壺を投げ付けたら、戦車が炎上して擱座したというのです。それを耳にした須見が、火炎壺攻撃を思いついたわけです。ガソリンを詰めて点火して投げると、エンジンの熱と日中四十度の猛暑で熱くなっている戦車の鉄鋼が、面白いように燃え上がったといえます。ただソ連軍が日本軍と違うのは、すぐ対策を立てたことです。八月に入ると、引火しにくいディーゼル・エンジンにして、戦車の周りには金網を張って、火炎壺を跳ね返すようになったのです。

関東軍は戦車戦の失敗で、新たに砲兵団を編成し、砲兵戦主体に切り替えることにしました。七月二十三日の朝、一万一千発という、これも日本陸軍としては空前の砲撃で総攻撃が始まりましたが、歩兵部隊が前進を始めたたん、それまで沈黙していたソ連軍の砲列が火蓋を切り、歩兵の前進はストップしたのです。大砲や砲弾の数でも次元が違っていた上、性能そのものも劣っていました。射程といて、砲弾の飛ぶ距離が段違いなのです。日本の七五山砲が八千三百発なのに、ソ連軍は一万七千発。重砲に至っては、日本の十五釐カノン砲一万八千発に対し三万発です。しかもソ連軍は左岸の高台から狙い撃ちにしてくるのに、こちらは相手が見えないのですから話になりません。

味方の砲撃が途絶えたので、歩兵部隊が重砲陣地に「あそこを撃つてくれ」と伝令を走らせると、「きようはもう配給が済みました」という返事です。砲兵戦二日目で、早くも弾薬がなくなっていたのです。これ以上の砲弾補給は難しく、「短期決戦は無理」。こう判断した関東軍司令部が、持久戦態勢転換のために各部隊に陣地構築命令を出したのは、総攻撃翌日の二十四日午後でした。

参謀本部は態勢建て直しのため、八月四日、荻洲立平中将を軍司令官とする第六軍を編成し、第二十三師団と第八国境守備隊を指揮下に入れましたが、本音は事件の早期終結です。関東軍さえ係争地から引き揚げさせれば、ソ連軍はそれ以上満州領内には深入りして来ないだろう、との判断もありました。そこで中島参謀次長は八月十九日参内して、「事件処理要綱」をこう上奏したのです。「解決には外交交渉を重視し、また交渉が不成立の場合でも、冬期の作戦困難な時期を利用して、第一線兵力を係争地域外に撤収させる考えであります」。そこまで考えていたのなら、なぜ舞台を早く外交交渉に移して、関東軍に撤収命令を出さなかったのか。事態はすでに手遅れだったのです。

実は、ノモンハンで日本軍が死闘を繰り広げている時、ヨーロッパは「激動の時代」を迎えていたのです。ある意味では、このノモンハン事件が第二次世界大戦の狂言回しの役割を務めた。そう言えるのかも知れませんが、ナチス・ドイツの暗雲が、ヨーロッパの空を日増しに重苦しく覆うようになっていました。昭和八年一月に政権を獲得したヒトラーは、「大ドイツ構想」のもと着々と軍備を強化

し、十三年三月にオーストリアを併合すると、八月にはチェコ・スロバキアに手を伸ばしてきたのです。ドイツ人が住んでいるズデーテン地方を併合しようと、国境に軍隊を集結させましたから、チェコと同盟しているフランスは陸軍部隊を動員、イギリス海軍にも動員命令が出ました。

ヨーロッパ中に戦争の緊張が走る中、イギリス首相チェンバレンがミュンヘンに飛び、九月二十九日、英仏独伊の四カ国首脳会談が開かれたのです。当事国のチェコ抜きで決まったミュンヘン協定は、ズデーテン地方のドイツ割譲という、実質的にはドイツの脅迫に屈したものでした。それでもヨーロッパ市民は「これで戦争はなくなつた」と歓声を挙げましたし、帰国したチェンバレンも英雄でした。しかし、チェコを犠牲にした平和は、一時的な幻想であり、ごまかしの平和に過ぎなかつたのです。ヒットラーは恫喝外交の勝利に、「英仏は戦争をする気はまるでないのだ」と自信を強めました。英仏との「不戦の約束」を守る積もりは全くなく、次の狙いをポーランドに定めたのです。

一方、ミュンヘン協定に大きな衝撃を受けたのはスターリンです。同盟国チエコの運命を決する重大な会談だというのに、その相談から締め出されただけではなく、英仏の弱腰も見せつけられました。しかもドイツの軍事的圧力が、ソ連に向けて大きく一歩踏み出してきたのです。スターリンはヒットラーの矛先をかわすため、「何かしなければ」と思ったことでしょう。ここに反共を旗印とするドイツと、共産主義が歩み寄る。ヒットラーとスターリンの不倶戴天の仇同士が握手をする——誰もが想像もしなかつたことが、実現する要素があつたのです。

ヒットラーがポーランド侵攻のため、まず動いたのは日本に対してでした。日本では昭和十四年一月五日、近衛内閣に代わって平沼騏一郎内閣が成立していましたが、ドイツはその翌日、「従来の防共協定して、日独伊三国同盟を結ぼう」と申し入れてきたのです。日独防共協定は十一年十一月に締結されましたが、ソ連だけを対象にし、それも相互援助協定であつて武力援助を約束したものではありません。それが今度の提案では、「締約国の一つが攻撃の対象となりたる場合には、他の締約国はあらゆる使用し得る手段を以て助力と支援を与うる義務を有するものとす」。対象国をソ連以外に広げ、しかも武力援助、参戦を義務付けるなど、軍事同盟そのものなのです。

明らかにポーランドに侵攻した場合、英仏が出てくるのを牽制する狙いでしたが、陸軍はこれに飛び付きました。支那事変が泥沼化し、中国戦線に三十三個師団と全兵力の七割も投入している時です。ドイツが西からソ連に圧力をかけてくれれば、ソ連が極東に向ける兵力も減りますし、支那事変に介入してくる心配もなくなりません。しかし、海軍と外務省は強硬に反対しました。自動参戦を義務付けた軍事同盟が英仏を対象に入れば、対米戦争に発展する恐れが出てきます。海軍は大臣米内光政、次官山本五十六、軍務局長井上成美のトリオでしたが、井

上は明快に言っています。「国軍はわが国を守るために存在するのであって、他国の戦争に馳せ参ずるがときは、国軍の本旨にもとる」。海軍省には連日のように「条約を結べ」と右翼が押し掛け、辞職勧告や斬奸状を突き付けましたが、米内は「最初から一切不動である。海軍側としては何ら讓歩する余地はない」と断言していました。山本が「述志」、志を述べるとして「此身滅す可し 此志奪ふ可からず」の遺書を次官室の金庫に収めたのもこの頃の話です。山本は「俺が殺されて、国民が少しでも考え直してくれりゃあ、それでいいよ」と言っていたそうです。こうして三国同盟を結ぶかどうか、五相会議は七月初めまで、延々七十数回の小田原評定を続けることになります。

ドイツは実は、ソ連にも「保険」をかけていたのです。「外交はイデオロギーに非ず」と言われますが、英仏と戦争になってもソ連から背中を撃たれないためです。まず一月三十日、ナチスの政権獲得記念日のヒットラーの演説から、これまで欠かしたことのなかった「共産主義罵倒」が消えました。ソ連に対するサインです。するとスターリンもまた、五月にリトヴィノフ外相を更迭しモロトフを外相にしたのです。リトヴィノフはヒットラーが排撃しているユダヤ系であり、親英仏、反独派だったからです。

この間、ヨーロッパ情勢は激しい勢いで展開していました。三月のチェコスロバキア解体に続いて、四月にはアルバニアがイタリアに併合されました。そしてヒットラーは四月三日、ドイツ国防軍に対して「ポーランド進撃を九月一日」とする極秘命令を出したのです。つまり、第二次世界大戦が九月一日に勃発する運命は、この日に決まっていたことになります。ヒットラーは英仏と戦争となった場合、日本とソ連とどっちと組んだらいいのか、利害得失を計算しながら九月をにらんで計画を進めていったのです。五月二十二日には、煮え切らない日本の態度に業を煮やしたように、ドイツとイタリアだけで友好同盟条約を結び、鉄鋼のような団結を誇って、「鉄鋼同盟」と豪語しました。日独伊三国を「枢軸国」と言いました。これはイタリアのムッソリーニ首相が、「ヨーロッパの国際関係は、ローマとベルリンを結ぶ線を枢軸として展開するであろう」。こう演説したことから使われるようになった言葉ですが、日本にも枢軸参加の働き掛けが強くなっています。

一方、ソ連にはノモンハン事件が勃発したことで、ドイツに接近する必要性が出てきました。ソ連としても、東と西の同時戦争はやりたくありません。しかも最大の脅威であるドイツの方から、誘いをかけてきたのです。スターリンがノモンハンに、ジューコフの要請以上の大兵力を送り込んだのは、ヒットラーの肚を讀んで、「これは極東どころではない。いつでもヨーロッパ方面で動き出せる態勢を取っておかねばならない。それにはまず、日本軍に対して思い切った一撃を加えておく必要がある」。こう考えたのです。

七月に入ると、「独ソ間で何事か進行しているようだ」。こんな噂が、ヨーロッパのあちこちで囁かれるようになりました。ドイツ大使の大島浩もリッベントロップ外相から、何度か独ソ接近をほめかされていました。しかし東京では「まさか、そんなことがあるはずがない」。こうした先入観もあって、「ドイツが三国同盟を結ばせるため、わざとそんな情報を流しているのだ」と、判断していたのです。

陸軍大臣の板垣が、何としても同盟締結に持って行こうと、平沼首相に一カ月ぶりに五相会議を開かせたのは八月八日でした。板垣が「留保なしの即時同盟締結」を強硬に主張すると、大蔵大臣の石渡莊太郎が海軍大臣の米内にこんな質問をしたのです。「同盟を結べば、三国が英米仏ソを相手にして戦争をする場合を考えなければならぬ。その際、八割までが海軍の戦争になると思われるが、我に勝算がありますか」。米内は即座に否定しました。「勝てる見込みはありません。大体日本の海軍は、米英を向こうに回して戦争をするように建造されておりません。独伊の海軍に至っては問題になりません」。有名なエピソードですが、米内の見識と信念のほどが分かります。そして陸軍にもただ強がるだけでなく、こうしたしつかりした現実認識が大切だったのですが、この一言で五相会議の結論はお預けになりました。

板垣はそれでもあきらめずに、陸相辞職の脅して同盟締結に持って行こうとしたのです。板垣が辞職して、陸軍が後任の大臣を送らなければ平沼内閣は崩壊します。板垣という人がお粗末だったのは、十日に軍務局長をわざわざオット大使に派遣して、「辞職、倒閣」の決意を伝えたことです。「辞職を決意する以外、可能なる方法なし」と言うのですが、オットは直ちに本国政府に打電、ヒットラーに日本国内にお反ドイツ勢力が根強いことを知らせることにしました。

ヒットラーは三国同盟をあきらめ、ソ連一本に絞ることにしたのです。餌はポーランド分割、ドイツとソ連で分け合うことです。モロトフ外相も八月十九日、独ソ不可侵協定を提案してきました。そして二十一日の夕方、スターリンからヒットラーに届いた電報は、「協定交渉のため、二十三日のリッベントロップ外相のモスクワ訪問に同意する」。ヒットラーは両手の拳で壁を叩いて、「これで世界は予の手に入った」と、大声で叫んだそうです。

ノモンハンでソ連軍の大攻勢が始まったのは、二十日の早朝でした。この二十日というタイミングは、スターリンが協定締結までに日本軍との戦闘にケリをつける決意をしたからです。スターリンとしては、ドイツとの交渉で何の弱みもない強い立場を必要としたのです。モスクワへやって来たリッベントロップが「何なら日ソ間の調停をしてもいい」と、ノモンハン事件の調停を持ち掛けると、グルジア出身のスターリンは、「私はアジア人だ。アジアとの付き合いは、私の方がよく知っている」。こう言って断ったといえます。

二十日早朝から猛烈な砲爆撃から始まったソ連軍の総攻撃は、「凄まじい」の一語に尽きるものでした。第一線部隊の戦闘詳報は、こう記録しています。「砲弾雨の如く、百雷一時に落つるが如く、黒煙濛々として呎尺を弁ぜず」、黒煙でほんの目の前も分らない。「砲弾の落下は概ね一分間に百二十発を算し、又陣地一平方米に一発の割合にして。散兵壕は跡形もなく崩壊し平地同様となり、所在の散兵は飛散す」。負傷した第二十三師団歩兵団長の小林恒一少将も、日記にこう書いています。「敵の砲撃を喰ひ為に各隊ばらばらとなり、師団も各隊も皆茫然たり。司令部職員皆無にして馬は離れ、自動車の行方は不明。如何とも手の下し様なし。此位情なかりし事はなし」。

何しろ五万七千の大軍が、戦車四百九十八台、装甲車三百八十五台を先頭に、火砲、迫撃砲五百四十二門、航空機五百十五機に援護され、一斉に襲いかかってきたのです。迎え撃つ日本軍は、北のフイ高地から南のノ口高地の三十^キにかけて三万足らず、火砲が百門程度、戦車、装甲車は一台もありません。陣地といっても簡単な散兵壕を掘っただけ。鉄条網もなければ、ソ連軍のようにピアノ線も埋めてないのです。しかも戦闘正面が広過ぎて、陣地と陣地の間隔が四^キから五^キと開き過ぎていました。とにかく「相手はウンカのようにやって来て、陣地の周りは全て戦車、装甲車。鉄の蓋をされたようなものだった」と言っています。各陣地は簡単に分断包囲され、孤立していったのです。

このノモンハン事件を調べていて、つくづく感じたのは、参謀たちはそれまでの戦闘から何を学び、何を教訓としていたのか。第一、陣地構築の現場をその目で見た参謀がいたのでしょうか。第一報を受けた服部作戦主任参謀は、「関東軍機密作戦日誌」に、こう書いているのです。「我の最も好機に敵が攻勢に転じたるものにして、この機会に於て敵を捕捉し得るものと信じたり」。関東軍司令部の報道班長も、「勝算我にあり」との新聞談話を発表しました。服部は一体何を根拠に、「我の最も好機」と見たのでしょうか。情報課の参謀が「陣地と陣地の間隔が開き過ぎていないか」と懸念を指摘したところ、作戦課の参謀は「敵を誘い込み包囲殲滅するため、わざと開けてあるのだ」と言ったそうです。日本陸軍ではいつも作戦優先、作戦参謀の発言力は圧倒的な大きさを持ちました。そこでは情報が軽視され、現実無視、ただ強がるだけの弊害は、敗戦までついに改められることはありませんでした。

ノモンハンが悲劇的な様相を示していた二十一日夜十一時過ぎ、ベルリンの国営放送は突然音楽番組を中断して、「独ソ不可侵条約が二十三日に締結されることになった」と、衝撃のニュースを流したのです。日本では二十二日の朝、定例閣議の前で、板垣陸相が同盟締結に平沼首相に粘っている時でした。ところが今の今まで同盟締結に政変まで賭していたのに、肝心要のドイツがソ連と握手してしまつたため、防共協定そのものまで全く無意味なものになってしまいました。

その上ドイツの行為は、「相互の同意なくしてソ連との間に、この協定の精神と両立しない一切の政治的条約を結ばない」。この防共協定の取り決め違反する重大な裏切りなのです。一切はご破算となり、平沼首相は二十八日、「欧州の天地は複雑怪奇である」の有名な声明を発表して、内閣総辞職しました。そしてドイツは予定通り九月一日、ポーランドになだれを打って進撃を開始し、第二次世界大戦が始まったのです。

ノモンハンでは末期的な戦闘が続く中、井置栄一中佐の搜索第二十三連隊がフイ高地で二十四日の夜までよく頑張っていました。しかしソ連軍は、フイ高地を飛び越して、どんどん先へ進んで行きます。井置は「尽くすべきは尽くした。フイ高地にはもはや戦略的価値はなくなった」。こう判断して二十五日午前二時過ぎ脱出命令を出したのですが、師団命令は「陣地死守」でした。これが「命令なくして陣地を放棄した」とされ、井置はピストル自決を強要されたのです。ソ連軍はフイ高地攻めあぐね、「日本軍は英雄的だった」と称賛していたんだそうです。

ノロ高地の第八国境守備隊も、二十六日夜には弾丸を撃ち尽くし、食料は三日前、水も二日前にはなくなっていました。この方面の機関銃だけを見ても、ソ連軍七百四十二挺に対し八十三挺、九倍も違うのです。こんな桁違いの火力の中で七日間も戦ったのが不思議なくらいです。隊長の長谷部理叡大佐は、連絡途絶の中、「死守に固執して全滅を待つより、後退して他の部隊と合流する方が態勢建て直しになる」。そう判断して撤退命令を出したのですが、やはり自決させられました。部下を犬死にさせるか、一時後退して再起を図るか、指揮官がこの二者択一を迫られた時、日本の陸軍では悲しいことに後退の道を取ることは許されなかったのです。

日本軍陣地の至る所に赤旗が林立し、もう組織的な戦闘力がなくなっていることは、第六軍司令部にも分かっていました。それでいて撤退命令をためらったのは、撤退イコール敗戦を認めたくないという、軍人特有の感情が支配したからです。荻洲軍司令官が「速やかに敵線を突破し、ノモンハンに向かい前進すべし」。前進せよと言うあたり、いかにも日本陸軍らしいごまかしですが、全軍に撤退命令を出したのは二十九日午前八時でした。やがてガダルカナルの敗戦でも、撤退と言わずに転進、転じて進むと言ふことになりましたが、小松原師団長以下二千人がどうにか脱出出来たのは、ソ連・外蒙軍が彼らの主張する国境線で停止し、後を追ってこなかったからでした。

敵中に孤立したために、撤退命令が届かず玉砕した部隊もありました。歩兵第七十一連隊は二人の連隊長が相次いで負傷、八月八日に着任した森田徹大佐も二十六日に戦死、東宗治中佐が指揮をとっていました。三十日の夕方には弾丸もなくなり、東は負傷していた当番兵に、「お前は出来る限り生き延び、状況を司令部に報告せよ。そして後世にわが連隊の最期を語り伝えよ」。こう命ずると「東中

佐四十八歳、突撃！」と叫んで、残った四十数人を率いて敵陣に飛び込んで行ったといえます。東は昭和十三年七月に召集されるまで山口県防府市の中学校で配属将校をしており、温厚で評判のいい教官だったそうです。山口県出身者の多いこの第七十一連隊は、四千五百五十一人のうち戦死、戦傷四千二百五十四人。損耗率実に九三%。第二十三師団の中でも最も大きな犠牲者を出した部隊でした。

外務省がソ連駐在大使にソ連との外交交渉を訓令したのは、平沼内閣が総辞職した八月二十八日です。言ってみれば、政府の知らないところで戦争が行なわれているのですから、陸軍から言ってみれば、政府の知らないところで戦争が行なわれます。戦闘終結を決断した参謀本部は三十日、関東軍に命令を出しましたが、「勉強メテ小ナル兵力ヲ以テ持久ヲ策スヘシ」。これでは、どんなに負けていても、戦うことしか考えていない関東軍の参謀が、作戦中止の要求と取るはずがありません。引き続き攻勢準備を始めたので、参謀本部も慌てて九月三日、再び作戦中止の命令を出したのです。関東軍はそれでもなお、遺体収容のための限定作戦を要求しましたが、参謀本部は許しませんでした。そして十六日にモスクワで停戦協定が成立すると、ソ連軍はそれを待っていたかのように、翌日十七日から東部ポーランドへの進撃を開始したのです。ドイツとのポーランド分割の密約に従ったのですが、ソ連はポーランド不可侵条約を結んでいたのですから、これも重大な背信行為でした。戦場での遺体収容作業は、それこそゴマ粒を撒いたみたいに死屍累々。「ああ、みんな死んでしまったなあ」。作業に当たった兵隊たちは、「この一語に尽きる」と言っています。何でこんな所で戦う必要があったのか、みんな分からないままに、ただ命令のために死んでいったのです。一年後に日ソ間で合意した国境線は、ほぼ外蒙側の主張していた線でした。

第一線將兵は、圧倒的な戦力の違いの中で実によく戦いました。一九九三年に秘密指定解除で公開されたソ連側の資料では、ソ連軍の戦死、廃疾七千九百七十四、戦傷一万五千五百二十一、戦病七百一、計二万三千九百二十六人となっていて、第六軍軍医部調査の日本軍損害一万九千七百六十八人よりも多くなっています。もつとも、このソ連側資料では日本軍の戦死一万八千、戦傷二万五千九百人としており、昭和四十一年に靖国神社で行なわれたノモンハン事件戦没者慰霊祭で発表された戦没者数一万八千人と一致しています。当時の陸軍は真相を隠すのに懸命で、第六軍の数字も故意に損害を少なくしていたのでしよう。

日本陸軍の軍紀は、陸大出のエリート將校には甘く、士官学校を出ただけの將校には苛酷でした。敵情判断のミス、独善的で拙劣な作戦指導、非合理かつ無謀な統帥、何度失敗しても同じ過ちを繰り返しました。関東軍幹部はその罪「万死に値する」ものでしたが、植田関東軍司令官、磯谷参謀長、荻洲第六軍司令官、小松原師団長が予備役に編入されただけでした。一番責任の大きい参謀に至っては、辻も服部も一時的に閑職に飛ばされただけだったのです。辻については「独

断専行がひどすぎる。予備役にすべきだ」との意見も出ましたが、結局は「将来有用の人物」ということで、申し訳程度の転出処分で済んでしまいました。これに対して捕虜になつて送還された将校は、非公開の特設軍法会議にかけられました。立ち会つた憲兵の話だと、裁判官は終了後、捕虜将校にピストル渡し、何も言わずにサツと引き揚げます。憲兵も「近寄るな」という命令が出て、間もなくピストルの発射音が響いてきたそうです。

辻は、手記に「顧みて戦力、統帥の補佐を誤り、数千将兵の屍を砂漠に空しく曝した罪を思うとき、断腸切々と、一応しおらしいことを書いています。しかし、その最後を「戦争は敗けたと感じたものが、敗けたのである」と結んでいるあたり、何の責任も感じていなかったのです。服部は太平洋戦争開戦直前、参謀本部作戦課長に返り咲き、辻もシンガポール攻略の栄光を担つて作戦班長に就任します。この二人がコンビを組んで陸軍の作戦を担当したのですから、ノモンハンの教訓が生かされるはずもなく、次々と同じミスを繰り返したわけです。

陸軍のノモンハン事件特別研究委員会は、昭和十五年一月、報告書を纏めました。しかし、その結論は「低水準にある我が火力戦能力を速やかに向上させなければならぬ」としながらも、国力上の制約もあつて、相変わらず「国軍伝統の精神威力を益々拡充する」と、精神主義が強調されたのです。一番大切だったのは、火力の充実をやるうと思つても出来ない。この国力の限界を、きちんと認識することだったのでないでしょうか。そうすれば、ソ連軍相手の局地戦でさえ負けたのですから、はるかに国力のあるアメリカ相手の太平洋戦争には、とても踏み切れることは出来なかつたはずなんです。結局は、敗因の究明が小手先のごまかしに終わったことが、太平洋戦争への道を開くことになります。

さらに言えば、独ソ不可侵条約でナチス・ドイツが外交上、如何に当てにならない国であるか、はつきりしたはずでした。しかし昭和十五年春になつて、ドイツ軍が破竹の勢いでヨーロッパを席捲すると、日本国内はその苦い教訓も忘れてしまつて「バスに乗り遅れるな」の大合唱です。一度は消えたはずの日独伊三国同盟論が再び猛烈な勢いで台頭し、日本は太平洋戦争に突入することになります。